

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	藏田 智之	指導教員 (主査)	奈良 雅之 教授

論文題目	<b>見知らぬ人に対する向社会的行動に影響を及ぼす要因と その形成過程について</b>
------	---

本文概要
<p>1. 問題と目的</p> <p>見返りが期待されない状況における向社会的行動（行為者が相手の利益のためにコストを払って、自主的に、直接的な報酬を目的とせずに行う行動(菊池, 1988)）の生起の理由について、Ajzen(1991)の計画的行動の理論の他、鈴木(1992)、Alessandri et al. (2009)、Caprara et al. (2012) のモデルを参考に、その行動意図に影響を及ぼす社会的態度、信念・価値観、認知傾向等の影響について研究することを第1研究に、また理由の形成過程について、半構造化面接による質的研究法を援用し研究することを第2研究の目的とした。</p> <p>2. 方法</p> <p>(1)研究1 18歳から59歳の312名（男性104名、女性207名、その他1名、平均年齢33.20歳、SD=13.94）を対象に質問紙調査を実施した。①向社会的行動尺度(菊池, 1985)を参考とした20項目、②Locus of Control尺度(鎌原他, 1982)の18項目、③正当世界尺度(今野・堀, 1998)の4項目、④コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORE s (藤本・大坊, 2007)の24項目、⑤社会考慮尺度(吉田他, 1999)の13項目、⑥成人用認知・感情共感性尺度(村上他, 2017)から18項目、⑦日本人青年用スピリチュアリティ評定尺度(濁川他, 2016)から12項目、⑧⑨親切行動実施意図と予測要因、谷他(2016)を参考にした14項目、⑩畏敬・畏怖体験, Yaden et al. (2018)を参考にした5項目を使用した。</p> <p>(2)研究2 第1研究の質問紙調査において、向社会的行動尺度得点が平均点以上で、面接調査への協力に承諾いただいた目白大学大学院の大学院生および学部生10名（女性9名、男性1名、平均年齢18.96歳、SD=0.84）を対象に、半構造化面接を実施した。</p> <p>3. 結果と考察</p> <p>(1)研究1 因子分析および主成分分析の結果得られた、各下位尺度得点間の相関分析において強い相関が見られた変数が、向社会的行動および行動意図に影響を及ぼすモデルを作成し、パス解析を行なった結果、鈴木(1992)で確認された、共感性とコミュニケーション・スキルのほか、畏怖・畏敬が、社会考慮、コミュニケーション・スキルを介して、親切行動意図に影響することが示され、畏怖・畏敬がより社会的なつながりを感じさせ(Bai et al., 2017)、他者とのコミュニケーションへの効力感を高めていることが推察された。</p> <p>(2)研究2 M-GTA(木下, 2007)を援用して分析した結果、18の概念と7つのカテゴリーが生成され、学習や想起・想像から向社会的行動に対する態度を形成し、それを自己の価値観として認識していることが示唆された。加えて、周囲への関心といった特性による援助機会の増加が相まって、向社会的行動を生起させていることが推察された。また、断られてもネガティブな結果にならないといった、コミュニケーションに対する自己効力感が、実行可能性を高めている可能性が示唆された。</p> <p>4. 結論</p> <p>人に対する畏敬の念が、今回生成された「感化」や「教え」、「よい環境」といった概念を構成する「学習」のカテゴリーの根底に共通して作用する感情体験であり、向社会的行動の生起およびその要因の形成過程に影響している可能性が推察された。</p>